

# 19世紀後半の東アジアにおける朝鮮と日本

東京大学大学院総合文化研究科教授  
月脚達彦

1392年に李成桂が開いた朝鮮は、明と朝貢・冊封の関係を結んだ。朝鮮は朱子学を重んじて科挙を実施するなど、明の制度に倣って国の体制を整え、年号と暦は明のものを使った。1627年、女真が建てた後金が朝鮮を攻め、さらに国号を大清と改めた1636年には太宗が再び朝鮮を攻めた。翌年、朝鮮国王は臣従の礼をとって降伏し、以後、朝鮮は1894年まで清朝と朝貢・冊封の関係を続けた。この1894年は、日清戦争開戦の年である。下関条約は第1条で朝鮮を「独立自主の国」と規定し、朝鮮の清朝に対する朝貢を廃止するとした。以下、この朝鮮の変化について、日本との関係を軸に19世紀後半の東アジア国際秩序の中で概観する。

## 1. 日本との外交関係の更新と日清対立の素地

1863年、高宗が即位すると、父の興宣君は大院君の称号を受け、幼少の高宗に代わって実権を握った。18世紀末以来、朝鮮には天主教（カトリック）に入信する者が現れ、19世紀に入ると国内にフランス人神父が潜入するようになり、政府は天主教に対する弾圧を繰り返していた。1866年、大院君政権がフランス人神父と天主教信者を処刑すると、フランス極東艦隊が江華島を占領し、神父殺害者の処罰と条約締結を求めた。朝鮮軍と戦闘したフランス艦隊は、略奪と放火を行って引き揚げる。それに先だち、アメリカ商船が通商を求めて平壤に至ったが、平壤の官民によって焼き討ちされていた。この年のアメリカ・フランスの侵入を丙寅洋擾（へいいんようじょう）と呼ぶ。1871年には、アメリカのアジア艦隊が条約締結を求めて江華島に侵入し、朝鮮側と戦闘を繰り返した。大院君政権が要求を断固と拒んだため、アメリカ艦隊は引き揚げた。このアメリカ艦隊の侵入を辛未洋擾（しんみようじょう）と呼ぶ。攘夷の意志を固めた大院君は、「洋夷」と和を結ぶのを斥けるという斥和碑を建立して、人々の精神を引き締めた。

一方、大院君政権の時代には、対等な交隣の関

係を結んでいた日本との間にも軋轢が生じた。1869年初め、成立まもない明治政府は王政復古を朝鮮政府に通告する。対馬藩からもたらされた外交文書（「書契」と呼ばれた）には、従来の慣行と異なる文言や印が使われていたが、朝鮮側がとくに反発したのは、「我が皇上が位に登り万機を親裁する」ことになったという文言である。「皇上」とは天皇のことである。しかし朝鮮にとって「皇上」とは中国の皇帝であり、書契を受け取ると日本は朝鮮より上位になる。こうして明治政府と朝鮮の外交関係の形成は行き詰った。ところが、1873年に大院君は対立する王妃閔氏の一族によって政権から退けられ、高宗の親政が開始した。朝鮮側に関係修復の動きがあることを察知した日本政府も、状況の打開に動き出す。1875年、外務卿の書契を携えた外務省官員と釜山の地方官との交渉が始まったが、ここでも書契の文言などをめぐって対立が生じた。日本政府は軍艦を朝鮮近海に派遣し、江華島で朝鮮側を挑発して交戦する。これを受け、1876年2月、日朝修好条規が締結された。

日朝修好条規は、日本側にのみ領事裁判権を認めるなどの不平等条約だったが、一方で、かつて書契で問題になった元首の尊号の使用を避けて「大日本国」「大朝鮮国」と国号を対等にし、第1款で「朝鮮国は自主の邦にして日本国と平等の権を保有せり」と謳った。すでに1871年に日清修好条規を結んで清朝との平等な関係を規定していた日本からすると、日本と朝鮮が平等なら清朝と朝鮮も平等であり、ここでいう「自主の邦」は「属邦」ではない「独立国」だと解釈されるのである（なお、この条約で朝鮮側の年号には1392年を元年とする「開国紀年」が使われた）。ところが中国と周辺国の朝貢・冊封の関係は多分に儀礼的なもので、その意味での「属邦」は「自主」と必ずしも矛盾しない。こうして朝鮮が「自主の邦」でありつつ「属邦」であることをめぐって日清が対

朝鮮最初の日本留学生として慶應義塾に留学した  
愈吉滑（後列中央）と、一八八二年に金玉均と  
もに来日した閔泳翊（王妃閔氏の甥、前列中央）。  
後列左は井上角五郎、前列左は福沢一太郎、後列  
右は福沢捨次郎  
（写真提供：慶應義塾福澤研究センター）

立し、さらにその対立に朝鮮の政治勢力が結びつ  
く素地ができたのである。

## 2. 甲申政変と日本、福沢諭吉

1879年、日本が琉球を沖縄県とすると、危機感  
を強めた清朝の李鴻章は朝鮮での日本の動きを牽  
制するため、朝鮮政府に非公式にアメリカとの条  
約締結を勧告した。斥和の風潮が強い中、朝鮮政  
府は当初これに応じなかった。しかし、1880年に  
日本に派遣された使節が駐日清国公使館を訪問し  
て、アメリカとの条約締結を勧める『朝鮮策略』  
という冊子を受け取り帰国すると、朝鮮政府は議  
論のすえアメリカとの条約締結を決定し、対西洋  
開国・開化政策を開始した。その一環として、朝  
鮮政府は1881年に日本人教官を招聘して新式軍隊  
を創設し、また日本に総勢63人の視察団を派遣す  
る。朝鮮最初の日本留学生が誕生したのもこの時  
で、3人のうち2人が福沢諭吉の慶應義塾、もう  
1人は中村正直の同人社に入学した。同じ頃、軍  
事・技術を学ぶ研修生が天津に派遣されている。

アメリカとの条約締結に際して、朝鮮政府は国  
内の反対を回避しようと、その交渉を清朝に依頼  
する。そのため、アメリカ全権との交渉は李鴻章  
が天津で主導した。李は交渉に際して、「朝鮮は  
中国の属邦であるが、内政外交は自主である」と  
いう条文を盛り込もうとした。朝鮮はアメリカに  
対しては「自主の邦」であるが、清朝に対しては  
「属邦」だというのである。李との調整のため天  
津にいた朝鮮の金允植はこれに賛同したが、アメ  
リカ側は「属邦」と条約は結べないとして反対し  
た。結局、1882年5月調印の朝米修好通商条約に  
はこの条文が入らなかったが、高宗は同様の旨の  
照会をアメリカ大統領に送付した。なお条約の朝  
鮮側の年号は開国紀年であったが、照会では開国  
紀年と清朝の光緒年号が併記された。朝鮮は続け  
てイギリス・ドイツなどと条約を結ぶが、その時  
も同様の照会を送付した。

一方、朝鮮では開国・開化政策に対する斥和派  
の抵抗も続いた。1882年7月、旧式軍隊の兵士の  
反乱に民衆が加わり、大院君と通じて政府を倒す  
壬午軍乱が起こる。この時、日本公使館が襲撃さ  
れ、新式軍隊の日本人教官らが殺害された。長崎

に逃れた花房<sup>よしもと</sup>義質公使は、政府の訓令を受けて軍  
艦とともに朝鮮に戻る。清朝も天津に留まってい  
た金允植らの要請を受けて朝鮮に軍艦を派遣する  
とともに、日本政府に対して自らが「属邦」の救  
援と「属邦」に居留する日本人の保護に当たると  
通告した。清朝との開戦を望まない日本政府も一  
旦は開戦を覚悟するが、清朝に開戦の意図はなく、  
戦争は回避される。壬午軍乱は清朝の軍隊によっ  
て鎮圧され、政権に就いていた大院君は天津に押  
送された。このため斥和派は力を失い、朝鮮政府  
は清朝の後ろ盾で開国・開化政策を継続すること  
となった。日本政府は清朝の仲介で日本の被害へ  
の謝罪や賠償などを盛り込んだ済物浦条約を朝鮮  
政府と結んだ。

日本で壬午軍乱に対して政府よりも強硬な態度  
をとったのが、福沢諭吉が創刊して間もない『時  
事新報』である。福沢は金玉均の命で日本に密航  
していた朝鮮人と1880年に接触したのを契機に、  
日本は西洋の侵略から朝鮮の「独立」を守るため  
に、「東洋盟主」として武力を用いても朝鮮を「文  
明」化させるべきだと唱えていた。その福沢のも  
とを、壬午軍乱の直前に金玉均が訪れている。金  
は帰国の途上で壬午軍乱の発生を知り、花房公使  
とともに朝鮮に帰ったが、済物浦条約にもとづく  
謝罪使節に同行して再び日本を訪れた。この2度  
目の日本訪問で、金は日本政府の斡旋で朝鮮の改  
革資金として17万円の借款を得て帰国する。福沢  
も朝鮮政府の新聞発行計画にあわせて慶應義塾出  
身者を朝鮮に送り、また日本への留学生派遣を斡  
旋した。ところが朝鮮では、壬午軍乱で派遣され  
た清朝の軍隊が駐留を続ける中、李鴻章の推薦に  
よる顧問が政府に配置され、袁世凱らによって軍  
隊が改編されるなど、清朝の干渉が行われた。金

は開国・開化政策を担当する官庁に登用されたが、王妃の一族らと対立する。新聞発行に従事するはずだった慶應義塾出身者も、計画が頓挫して日本に帰国した。残った井上角五郎が、当初の計画から大幅に後退した形で新聞の創刊に漕ぎつける。こうした中、福沢も金も朝鮮の「独立」「文明」化の障害は清朝との朝貢・冊封の関係だと考えた。

金は300万円の借款導入を目的に、1883年に3度目の日本訪問を果たす。しかし清朝との衝突を望まない日本政府は消極的で、金は目的を果たせずに1884年6月に帰国した。この頃、清朝はベトナムをめぐるフランスと対立を強めており、朝鮮に駐屯していた軍隊の半分を引き揚げていた。金は3度目の日本訪問中にクーデターを決意し、福沢もそれに同意したと推測される。また、1年近く帰朝していた竹添進一郎公使は、10月末に朝鮮に帰任すると金に接近した。そうして12月4日、金はクーデターを執行した。この甲申政変の主導勢力を、今日では急進開化派と呼ぶ。ところが6日に袁世凱率いる清朝軍が介入して、甲申政変を鎮圧した。金は日本に逃れ、一時、福沢の家に身を潜める。

ところで、甲申政変には竹添公使が公使館警備隊を率いて関与していた。日本政府は清朝と朝鮮政府からの責任追及を回避しなければならない。また、福沢がクーデターの準備にどれほど関与したか不明だが、井上角五郎が現地で金玉均と関わっていた。それまで「東洋盟主」論を掲げて朝鮮の「独立」「文明」化を唱えてきた『時事新報』は、一転して日本は急進開化派と無関係であると強調し、逆に甲申政変鎮圧時の日本人殺害に対する清朝軍の責任を追及する論陣を張る。さらに、朝鮮政府が甲申政変関係者の父母妻子まで惨殺したという報が伝わった。未開な「支那朝鮮」との絶縁を宣言した『時事新報』1885年3月16日社説「脱亜論」は、このような状況で発表されたのである。

### 3. 朝鮮の「独立自主」とその行方

甲申政変によって朝鮮では急進開化派が一掃されるとともに、民衆の間に日本と「開化」に対する反発が広まった。一方、日本と清朝の衝突の危機は、1885年4月に日清が天津条約を結んで朝鮮

から軍隊を撤退することで回避された。ところが清朝の干渉強化を嫌った高宗は、ロシアに接近して清朝を牽制しようとする。するとロシアと対立していたイギリスが、朝鮮半島南部の巨文島を占領した。李鴻章は英露の仲裁に入るとともに、袁世凱に強い権限を与えて高宗と朝鮮政府を監督させる。一方、英露対立に巻き込まれることを恐れた日本政府は、朝鮮における清朝の優位を認めた。福沢も巨文島事件の後、朝鮮問題に関して沈黙する。高宗はなおもロシアに接近しようとしたが(そのため金允植ら清朝との関係を重視する穏健開化派が失脚する)、袁によって阻止された。清朝に対する高宗の抵抗は続くが功を奏せず、逆に1894年に甲午農民戦争が起こると、朝鮮政府は清朝に出兵を要請した。この時には日本も対抗して朝鮮に出兵し、朝鮮政府に清朝との冊封・朝貢の関係を破棄させるとともに清朝と開戦した。

日清開戦と並行して始まった甲午改革で、朝鮮政府は「独立」国として「開国紀年」を正式な年号に採用し、さらに1896年から陽暦を採用すると同時に高宗の年号として「建陽」を定めた。科挙が廃止されたのも、甲午改革においてである(写真の兪吉濬はこの改革で大臣などを務めた)。しかし、三国干渉の後に日本に対する反撃を始めた王后閔氏(王妃から王後に格上げされていた)が日本公使関与のもと殺害されると、親日の度合いを強めた改革政府と日本への敵愾心が強まった。1896年2月、高宗が王宮を脱出してロシア公使館に逃れて、甲午改革は終息した。翌年、王宮に戻った高宗は、新たに「光武」の年号を定め、ついで皇帝に即位して国号を「大韓」に改めた。

以上のように、19世紀後半の朝鮮の「独立」には日本が密接に関係していたが、その「独立」には常に反発が伴った。大韓帝国の成立もその一例である。その後、大韓帝国は1910年に日本によって「併合」されるため、19世紀後半の日本政府や福沢の朝鮮の「独立」に関する主張も虚偽に過ぎないという見方もできよう。しかし、19世紀後半の日本と朝鮮が、「独立」をめぐる異なる経験をした事実を、双方の視点から複眼的に理解することが、朝鮮史を見る上でも日本史を見る上でも重要なのである。